

2021 年 12 月 17 日 9:30～11:30

市役所 3 階 305 会議室

1 開 会

2 あいさつ

(小林教育長)

改めておはようございます。第 5 回のあり方検討会議であります。

6 回中の第 5 回でありまして、この次、1 月の 24 日に最終回が行われるんですが、その時には、ある程度原案をもとに、皆さんのご意見をお伺いするというような形になりますので、自由闊達な意見って言ったら、今回がやはりその一番の最終段階にあるかなあと、もちろんあと 2 回ありますので、存分に話し合っていたきたいんですがそんな感じになると思いますので今日はどうぞご自由に、本当に思っていることを言っていただければと思います。

先ほど、先日終わりました 12 月議会で、来年度からいよいよ私達が考えてきたあり方検討会議の 2 年間の思いを土台にしまして、須坂市小中学校適正規模等審議会、これを設置することを認めていただきましたので、これから事務局として、この準備に入っていくという段階であります。繰り返しますが土台を作っているということ、それからこの 2 年間で、これから私達が進めていく須坂の子供たちの未来の姿への大きな 2 年間であったということは私、本当に感じておりまして、あと 2 回でまとめていただくことがとても大事だというふうに思っています。

ちょっと長くなって恐縮なんですけども、これからはちょっと眩きだと思っていただければと思うんですが、大寒波がやってきます。こうとしています。

ちょうどこの頃歌う小学校の 5 年生の教科書に冬景色ってのがありますが、大正の最初にできた曲ですのもう 100 年以上前の曲です。私も音楽の教員やっていましたので、この冬景色は子供たちと何回も何回も歌いましたけども、あの 3 番にですね、こういう歌詞があるんです。嵐吹きて 雲は落ち 時雨（しぐれ）降りて 日は暮れぬ 若（も）し燈火（ともしび）の漏れ来ずば それと分かじ 野辺の里っていう、3 番の歌詞なんですが、ちょうど今の季節を歌った歌だと思うんですが、私達はこのともしびが、小さい光がですね真っ暗な 12 月の闇の中にある、あそこにきっと温かいぬくもりがあるんだろかなあと思うから、何かほっとする。そしてどの家庭にあの温もりが感じられるような世界があればいいなあ、もっと言ったら、子供たちの 1 人ひとりのやっぱり、心の中にもああいう真っ暗の中にも光があってその光を求めるそんな心豊かなものが心の中にちゃんと光ってるってことが大事かなってことを常々思います。そんな意味から、私達がやってることは、そういうこれからずっと生きていく子供たちの中にそういう心豊かな光がいつもあって、温かいものが心の中にありながら、厳しい現実とこう向かい合っていくっていう、そういう力強い生き方を応援する、そういう環境作りかもしれません。駄弁をはいしてしまいま

したけども、今日も伏木先生に中心になっていただいて、話し合いを進めていただきます。
どうぞよろしくお願いいたします。

3 議 事

(清水教育次長)

それでは早速ですが議事の方に入っていきたいと思います。ここからの進行は座長の伏木先生の方をお願いいたしたいと思います。よろしくお願いします。

(伏木座長)

今日用意されている議題は二つ大きく分かれています。一点目が学校運営や教育を取り巻く地域活動に関する取り組みについて。そして後半には少子化に対する対応案についてという、次年度に繋がるような議論をということです。

ではまず一つ目ですね、学校運営教育を取り巻く地域活動に関する取り組みについて最初に事務局の方から資料も出ていますので、ご説明いただいて、その後、委員さんの方からお話しいただこうと思います。では事務局お願いします。

(1) テーマ「学校運営や教育を取り巻く地域活動に関する取り組み」

(中村学校教育課長)

次第がついている資料、おめくりいただきまして2枚目の裏面をご覧くださいと思います。各校PTA役員からの意見書というものです。これは何かと申しますと、実は先月ですねPTAの役員さんたちと懇談をする機会がありまして、これはいい機会だなと思ひまして、昨年度いただいた提言書の内容について皆さんどう思いますかっていうことを投げかけてご意見いただいたものでございます。二つの点を伺いました一つ目が去年の提言書にある家庭や地域の教育力を高めるというこの四角の中の提言についてどうですか。共感するところはどこですか、逆に異論があるところはどこですか、というふうにお伺いしました。概ねですねこの学校のPTAの皆さんも共感できるということでありましたが、異論があるところとして、保護者自身がですね、学校とか教育に対する関心が薄れてきているように感じるんだよと。それから、地域によっては子供が少なくなっていて、町だけの活動って難しいんだよと。もう学区全体でやっていかなきゃ駄目だっていう意見、それから、子育てセミナー確かに大事で皆さんに出ていただきたいんだけど、即効性はないけどいつか役立つというだけだと共感が得られにくいなと。メリットを明確に見いだせない、皆さん関心示さないよ。というご指摘をいただきました。

それからもう一つですね、学校運営について、これまで当たり前と思ったことが束縛からの解放、この四角の中の点についてどう思いますかというご意見を伺いましたら、これについてもですね、先生がたに心身ともにしっかり休んでもらって、子供たちをしっかりと向き合ってもらいたいんだというようなご意見多くいただきました。おおむねこの提案についても賛同いただいています。逆に異論があるところではですね、ただそうは言っても同じ小学校の異論があるところなんです、行事の見直しについては慎重にお願いしたい。というご意見をいただいています。それから別の旭ヶ丘小学校の異論があるところなんですけれども、

子供たちからも意見やアイデアを聞いてもいいのかなと思いますという意見をいただきました。

それから「やってもらって当たり前」という意識の保護者がとても多いです。そういうところは何とかしなければなあと言う意見をいただきました。やっぱり一回なくしたものを復活させるには、労力もかかるので慎重に選択して頂きたいというようなことで、提言書全体的には賛同いただいているんですけどやっぱり見直しについては慎重にというご意見をいただいています。参考にしていただければと思います。以上です。

(伏木座長)

続けて、委員の方々の中で今ちょっとPTAに関わるような内容でしたので、いかがでしょうか新野委員や宮川委員の方から何かご意見いただければと思いますが。

(新野委員)

私も5年ほど前に、PTAの会長職を務めて、本日も元顧問として呼ばれているのでちょっと時間経っちゃったらあれなんですけども、およそ各学校のPTAの役員の方々がおっしゃられていることに共通するものは何かということとやっぱり学ぶ機会があるかないかということだというふうに思っています。大変僭越なんですけども私自身宮川会長がいる中で何回か講演をさせていただく機会というのがありまして、今PTAにあるものっていうのが何かといいますと、何をやるのかって言うだけなんですね。去年までこういうことをしてこの行事を誰がやるんですか。ていうことが引き継ぎになっているんですね。一番大事なこの組織はそもそも何のために存在し、誰のために何を行うんですか。そのためにはいつまでに何をすべきなんですかというような根本的な話し合いっていうのがほぼ皆無で、それをまずちょっと考えましょうというところが私にとってはPTAのスタート地点でした。そのために、三つ必要なこともありますと、この本来の過去遡っていけば、当然給食がないとかそれを確保しようとか、学校修繕しようとかっていう具体的な物理的なやんなきゃいけないことがあったんですが、今のこの時代というのは、既にそれはもう乗り越えつつあって、じゃあ何かっていったらやっぱりPとTのアソシエーションなわけですから、保護者と教員がまず一緒に学びましょうと。で、その保護者とか教員とか子供もそうなんですけども、その方の考えているレベル以上に学校も地域も国も良くなりませんよねと。であればやっぱり学ぶ機会というのは必要であろうと。その成果と一緒に学んだ成果を学校や家庭や地域に還元することで、それが実は子供たちの健全育成に寄与しているんですよっていうことを言葉にしました。それが実はPTAがやっている事業の本質的なあり方ですということで、個人的にはあるんです私としては上高井郡市PTA連合会含めてそれを提起いたしました。

もう一つ一番大事なのが民主的に運営することです。理事会、総会も含めて民主的な自治を通じてその保護者の方や教師の方々の民主主義の練習の場としてちゃんと機能させることだから表決も取りますし、反対意見を取りまとめますし、それを総意として行います。で、みんなで考えてみんなで決めます。決めた以上は失敗しても、誰かのせいにするのではなくて、みんなでこの後もうまくやりましょうということを必ず総括をして、次年度にバトンを渡しましょうということを行いました。ただ残念ながらですね、PTAっていうのは1

年なんです役割が。なのでこれが、どれだけ頑張っても、なかなか、2年ぐらいたつとですね、姿かたちがなくなってしまいまして、この中でもっとメリットがあるのを明確にして、何かあった方がいいよって意見があったんですけど、何かそういう場はあってもいいのかな、各学校が1年ごとに入れ替わっても構わないんですけども、それを司っている上高井郡市とか県とかが複数年任期でやったりしているので、選考があったり駄目な人は落としてもらっても構わないんですけど民主的に落としてもらって構わないんですけども、ある程度長期的な物の見方の中で運営ができると少し変わる可能性はちょっと、あるのかなあというふうには考えました。

以上です。

(宮川委員)

お疲れ様です。私の方から、今、新野委員さんからもお話あった通り、基本的にPTAという組織が今現在、どうしてもこう不要論が出ていたりだとか、実際に入会する意味があるのかだとか、それも含めた中で、やはりそういった本質的、今まで当たり前だったものが、ちょっと見直しをしていかなければいけないんですけども、その中身を実際にしっかりと見ていくと、これは未来を作り上げていく。やはり家庭と学校とそれと地域の、その一つのキーになるんじゃないかなって言うふうに私は考えています。そのような中で、やはりこういった今回のコロナの関係で、様々な事業だとかそういったものが中止や延期に追いやられて、そういった事業をやること自体が不要ではないか、今までいなかった、これまで当たり前に行っていたけれども、これもいらんじゃないかなってという議論が改めて出てきた中で、しかし、やはりこういった直接会って、人と話をする2次元的な、例えば会議だとかそういったICTを使ったり物を使ったやり取りが、やはり全てではないっていうのが今回しっかりとわかったというふうに思いますので、そういった部分の中で保護者に対してのもの、保護者が子供たちにむかえあうものに対して、しっかりと私達、PTAの親たちがまず学ばなければいけないのと同時に発信し続け、その中でまた中身も含めて、より伝えていかなければいけないなというふうに考えています。

そういった中、上高井郡市PTA連合会でもYouTubeチャンネル等を作りまして、今年の4月に、新野さんに講演をしていただきました。先ほどのお話の中にあったような、例えばPTA運営だとか組織の運営だとかそういったものについて動画で発信をさせていただいたんですけども、やはりこれまでそういったものを、自体を考えること自体はなかったですけども、やはり新たな取り組みをしていくっていう重要性、それと最初はそういったものの影響というのは本当に小さなものですけども、それが少しずつ広がっていくことをやはり諦めずに継続していくということが非常に大切だなというふうに思っております。そういった部分で不要論、いろいろと叫ばれていますけれども、やはり私達役員等が、より生き生きと発信をし続ける、そういったものを少しずつでも広げていくことが必要だろうというふうに思っております。

(伏木座長)

続いて、学校関係からいかがでしょうか。このあたりの意見を集中していただきましたけ

ど、校長先生の方で何かご感想や実感等、何かありましたら、両委員、それぞれ言葉をいただければなあと思うんですけど島田委員からお願いします。

(島田委員)

やっぱり職員の中にもPTAっていうものの何と言いますか、それがなかなか、浸透していない部分も一方であるのかなと。最近ということではなくて、随分前から感じているところです。職員の中には、このPTAというのは保護者がやる組織って、教員は時間外の部分の活動が多い。そういった中で、サービスの的ですかね。言葉悪いですけども、関わっていくような、そんな意識がある部分もあるのかなっていうふうなことは、感じているところです。個々に限って言うと、今後もそれほどそういう意識が伝わってきませんので保護者とともに進めていこうというそんな雰囲気はあるんですけども、そうは言ってもやっぱりいろんな部分で校務の部分等、校務外の部分等というところでの、なかなか折り合いがつかない部分もどうしても出てきますので、そこは学校長として、きちんと振替して、確実にその分をなんとかできるようにすることは、可能な範囲でお願いしているし、実際に振替とっているところもあるんですけども、なかなか現状、校務の部分に穴を開けにくいっていう意識もあって、そうはいってもそのまま流れていくというところが、現実的なところかなと思っています。今、新野さんと宮川さんがお話ししていただいた事は本当に大事なところだなというふうに思っています。

やっぱり学校だけでということではできませんし、もちろん家庭でも様々、不安や課題を抱えている、そういった部分をPTAという組織の中でどういうふうに互いにサポートし合っていけるのかっていうことは、とても大事な視点だと思っているんですけどもなかなかその浸透していかないっていうもどかしさもあるのかなというふうに思っています。このコロナ禍の中で本校は、とにかくできることはやろうっていうことで小規模校であるっていうこと、特徴を生かしたので、昨年も今年度の昨年も資源回収というPTAとしての一大行事については、他校は中止という形になっていく中でも実施することができました。子供たちの姿が、一緒に活動する姿を見ていてもいろいろなやり方の工夫をしながらやることで、手ごたえと言いますか、そういったものが持てる、それが会全体と共有できるといいなってことを感じています。ちょっとまとはずれになってしまいましたが。

(佐藤委員)

今、新野さんと宮川さんのお話を聞いて、その本質を考えていく必要性みたいなことがお話になったんですが、学校職員もそういうことが本当に必要だなというふうには強く感じています。コロナ禍ということで、行事初め、PTA活動も見返ししながら何ができるかということでやってきている学校現場ですけども、振り返りますと、やっぱりPTAの皆さんには本当に学校の運営を助けていただいている部分が大きいので、資源回収をやっていたり、それから豊洲は2年前に浸水にあいましたけれども、その回復にも本当にボランティアとして仕事を休んで来ていただいたり、何かそういう中で本当に支えていただきながら、助けていただいているということも思いつつPTAの皆さんに学校としてお返しできることはあるのかなということも考えながら、日々送っているようなところがあります。ですので

本質それからやってよかったっていう役員の皆さんのお気持ち、毎年聞くわけですが、本当にいろんな皆さんに広がっていくといいなということも思います。

それから行事の見直しという点も、この中で語られていますけれどもコロナになる以前から、働き方改革にしても何にしても、行事の見直しをしていこうということで取り組んでいる中での、コロナ禍でしたので、ちょっと見直ししようという加速したようなところはあるかなと思うんですけれども、やはり行事の規模が縮小しても、そこへ向かう子供たちの気持ちは大きく変わることはなくて、やっぱりそこへ向けて限られた時間で限られた内容でも一生懸命やろうとしますし、やった中には達成感を感じられているので、縮小だけがいけないということではないし、本当に何が必要なのかっていうことを見極めていかないときに来ているなということも感じていて、それをまた保護者の皆さんにもご理解いただきながら一緒に進めることは大事だなというふうに思っています。

(伏木座長)

実は私自身も3番目の子供のときにPTA会長、ちょうど100周年だったんですけど、それやらせていただいたときにですね、学校の先生の中に、PTA担当っていう先生がいて、あれ、PTAって先生全員じゃないのかなと思ったんだけど、PTA担当の先生ばかりが役員と折衝して会に出てこられると、他の先生は部活やっていたりとか、他の活動をやっておられるっていう学校も結構多いですね。先生たちも時間がないからやむを得ないんだけど、やはりPTAと本来の意味がなかなか機能できないような実情があるなっていうのが1点。

それから、やっぱりPTA役員やると一番痛いのは一般の会員の親御さんの参加率とか意識、どういうふうに合わせていこうかということで悩まれるんですけど、集めればいいのかっていうとまたそうでもない。それはこちらの声にも書かれているように思うんですよね。必要感とか、来る意味とかそういうことを考える必要があると。そのときに先々週ですね、大町的美麻地区っていうところで、コミュニティスクール、おそらく私、長野県で一番進んだコミュニティスクールだと思うんですけれども文科省型です。信州型ではありません。簡単に言うと信州型っていうのは学校大変だから地域応援団になろうって、先生たちを助けましょうっていうような形になってますけれども、文科省型っていうのはそうではなくて、地域の運営協議会が学校の運営方針について、それを認めるかどうかを意思決定するとかですね、東京の方は人事まで口出すってことなんですけど、長野県は無理なのでそこはやらないけれども、かなり地域が学校運営していくっていう、そういうスタイルが文科省型なんですね。そっちになっていかないと、このPTAの問題とか保護者と学校の関わりっていうのが難しいかなと、今やっぱり親御さんも公平平等の原理をやっぱり持ち込んで、卒業までに一度は委員やりなさいっていう形で入学式のときに座った席で何年生の委員で決めちゃう学校もあるんですけど、そうしないと公平に全員が割り当たらないっていう、そういう論理ですね。おそらく親御さんがそういうことで、やらされるというものになると、お子さんにも多分いい影響はないだろうなあとあったり、そのへん役員さん悩ましいですね。

ちょっといろんな話をしましたが、そうすると学校を支える地域の人たちの活動もノルマを与えて一律みんな一緒にやるんだっていう掛け声ではなくて、本当に無理なくできる人から

どんどん関わって、その活動が楽しくて、そして意味を感じて、地域の中に生きている自分がやっぱり自己肯定感を持てる大人。自分の子供が学校に通ってるかどうかあまり関係ないんですね。くらいなんです。地域で子供を育てようという本来の姿のコンセプトに戻って。そういうやれる人からやっていくと、裾野が広がっていったって、そういう自治体が全国にあるんですもう既に、だから何年もPTA役員やっていますなんて人はそういうところもあるんですが、そろそろ日本はこの少子化の中で、地域のあり方、地域が学校にどんどん入り込んでいくと、学校は敷居が高いから、もうちょっとその敷居をちょっと下げていくっていうそういう時代に入っているのかもしれないと、ちょっとお2人がねPTA関係者のお話を聞いてつくづく思いました。すいませんちょっと時間を取りましたが、それでは委員の皆さんいかがでしょうか。どうどんな観点からでもご自由に。

(勝山委員)

今のPTAのお2人の話と、現職の校長先生方のお話を聞いていて、どちらも本当にその通りだなと思いました。教育長の方で思ったこと自由に言っていっていいということなので、私この会もずっと出てるんですけどね、学校を終わった後、なんでやってこれなかったかなっていうことが、結構うまくは整理ができないんですけどもあるんです。今PTAの場合も、実はですね、私現職ですずっとやっていた時には、PTA活動というのは学校の一つの柱というかむしろ学校が運営するための土台の一部を、担っていただいていた気がしたんです。ですから、全て学校があるから学校のために、まさに今、伏木座長が言われた通り、お手伝いをしていただくとか、調理室のお皿を洗っていただくとかね。子供たちにはありがたいねって話をしていたんですけども、今座長のお話の通りこれからは、今まで別々の存在として、繋がろうとしていたものが重なり合うような位置関係に持っていけないんじゃないかなと思ったんです。そのときにおそらくPTAの方たちもお仕事をされて忙しいし学校もそれぞれあると。でもその中でもお互いに何を求めていくか。学校をよくするってことよりもそこに子どものために何ができるかという視点で、オーバーラップしていく、何か活動とか話し合いとかもちろん授業の参加もいいと思いますし、そういうことをやるということがすごく大事なんじゃないかなっていうふうに本当に思っています。講座、セミナーもあるんですけど、私もやらさせていただいたこともあるんですけども、そういう学習ももちろん大事なんです。でそれは家庭とか家庭のおうちのかたもいろんな力を育てる一助になるとか、それから教育力を高めることになるんですけども、それだけではやっぱり何かはまだ十分ではないっていうこの感想を見てもそうですよね。そういうことはむしろ学校もカリキュラムの自由度を高めながら、そのオーバーラップをしていっておうちの方もその子供のために一緒にやりましょうってことをやるのが結果的には要するに、保護者のいわゆる教育力と家庭の教育力って言われるところにも結びついてるんじゃないのかな。ただじゃあこれをすぐどうやればいいかっていうことは、今みたいに長野県型じゃないつくりというか組織になっていけばかなり入りやすいんですけども、現状だとすぐにつけてわけには行かないと思います。意識して何ができるかっていうのをこれから模索していく、あくまでも子供のためにそんなふうに自分も反省を感じながら、強く感じるところです。

(本多委員)

いろんな意見があることが大事だと思うので、発言させていただきます。

この間、本校の初任の先生が、すばらしい研究授業をやり、生徒たちも生き生きしてあっという間の 50 分だった。その先生にこの授業を組み立てた時間を聞いたところ、50 分の授業のために 10 時間。毎回できるわけではないが、いい授業を作ろうとすると時間が必要です。今、高校 3 年生と推薦入試の面談の練習をしている。先生になりたいという生徒もたくさんいるが、その話を親にしたら、学校はブラックだから止めろと、言われてしまったという生徒がいた。生徒や保護者から見てもそのように思うようです。

先ほどの初任の先生は、ある運動の顧問ということで、9 月、10 月は土日 1 度も休んでいない。本当に頑張っている。それで 10 時間を使って授業を組み立てているけど、日々授業があるので、生徒のためにいい授業を作るために時間を割いている。けれど、そういう時間はどんどん奪われているというのも現状としてある。

先程、学校の中に PTA 係というものがあるという話があったが、そうでないとやっていけないところがあります。

同窓会も同じですが、例えば同窓会だったら同窓会長が中心になってリーダーシップを発揮して、印刷物や会計も全部同窓会でやるのが本来なのかなと思う。

一方で、現実問題として、学校に任せないと印刷もそうだし生徒への配布もそうだし、会計も全部学校に任せないと回らないことも多い。そうすると、先生たちは授業以外で PTA や同窓会のために色々なことをします。授業以外の多忙感の中で日々を送っている。目の前には非常に多感で変化成長著しい生徒がいて、毎日真剣に向き合っている。それと、授業という本来のそれに集中して頑張ろうと思っているんだけど、そういうことも時間と精神的エネルギーが削がれてしまっている現状がある。

先生の多忙さは、皆さんのお子さんや私も、子や孫の利益に直結する話である。そういうことをやっぱり考えてもう 1 回その意義をきっちりと見直して、止めるべきは止める。必要なのは残していく、ということをやる時期にきていると考えています。

もう一つテーマにある地域活動の取り組みについてですが、本校では須坂市役所が中心になって、例えば空き家プロジェクト、市内の名所の看板、市立博物館の評議員に高校生を採用していただく等の機会を与えていただいている。そのような場や機会を通じて、非常に生徒は成長している。そのような経験を通じて、地域に関わることの大切さとか、地域への責任感とか愛着が確実に身に付きます。

それは学校からではなく、市の方から投げかけてくれるので、それに呼応するように生徒が動いている。そうすると、学校の先生が何かするわけではない、生徒が成長する場を学校以外で作っていただいていることを有難く感じている。

(山岸委員)

今日のテーマ 1、2 に関わることですが、須坂市が今目指していく教育、つまりこの環境変化や社会や学校が何を求めているのか、そういうことについて今はチェンジするときであって、チャレンジするときであって、そのチャンスが今である。

こういうグランドデザインをしっかりと多くの方に周知していただいた中での議論になって

いくと、もっと思い切ったことやアイデアが積み重なってくるのかなと感じます。

（垂澤委員）

地域活動に関する取り組みということで、私個人的には町の育成会長を仰せつかっている。昨年はコロナで何もできなかった1年、また今年はコロナ禍が明けてくる、じゃあこの行事ってどうしたらいいかって非常に悩む1年間過ごしてきました。

例えば仕事に代表されるやなくてはいけないもの、やらないとマイナスになってしまうの。これについてはいろんな社会経済活動が再開される中で復旧はしてきているが、町の子供たちに関わる行事とか地域活動みたいな、やるとプラスを生み出すものに対する労力は非常に必要だなと感じている。

コロナが終わった後に少子化の問題に直面したときに、本当にそれって必要だったのか、いらないものじゃないのかっていう部分で町の行事だったり、育成会活動とかそういったものは定着してしまわないかなと危惧している。

また、PTA 活動への取り組みということで、私の園では PTA を廃止する方向で検討しています。次年度から PTA 活動を廃止すべきかどうかということで、保護者の意見を集約している最中です。やはり、色々な多方面の意見を聞いて、本当にそれが必要だったのか、そもそも本来の本質は何だったのか、そこにやっぱり一度立ち返って、必要だということであれば、やっぱりその先に見えてくるものがあるのかなと感じています。まさに PTA という組織が今問われていると感じています。

（宮崎委員）

私の義務教育が終わったのが6年前で、今の状況が分からずに申し上げます。自分の時代も身近に PTA という存在はあったが、今改めて気付くところも多くあった。やはり主体となっている子どもたちが、その支えになっている親御さんたちの PTA の存在をあまり感じていない。そうすると、次の世代があまり PTA の存在を知らないまま、子どもが育って学校へ通い始めると、なかなか PTA に参加し辛い、高尚過ぎる、面倒くさそうとか敷居が高くなってしまうものの仕方ない部分もある。

重要なんだけど、その敷居を低くして、忙しい方でも少し参加しやすいような、そんなの体制が今後持続可能っていう部分では求められる。誰か1人がずっとやっていくのではなくて、短い間でも関わられるような、そんな仕組みがあればいいのかなというふうに思いました。

敷居を低くするっていうところでは、例えば講演会をするにしても、高名な先生をお呼びしてすごく勉強にはなと思うんですけども、より身近に感じるとすると、その PTA の保護者の方一人一人が色々なキャリアを積まれている方がいて、講演を聞くにはすごく大変貴重なものになるのかなと思っています。そういう身近なところから講師という形というよりは、座談会みたいな形で子供も参加して、それをキャリアのイベントにしてしまう。親の仕事紹介が、学校側にとってはいろんな民間の見方が知れたり、子供から見れば大人ってこういうことやっているんだなとなるので、敷居を低くするやり方は今後いろんな考え方があって、子供の参加もしていければいいのかなと思います。

(伏木座長)

第1のテーマに関して、先ほど山岸委員からグランドデザインを作り変える発想が必要なんじゃないかという意見をいただきました。

私は、栃木県の栃木市の農村で生まれた百姓の長男なんですけど、育成会っていうのが当時あって、毎年育成会が全国の何か面白いところに子供たちをバスに乗せて連れてってくださったんです。それで地域の子供たちは仲良くなるし、大人たちとも仲良くなるし、そうやってきたのが育成会だったと思うんですよ。

でも今私が住んでいる町では、育成会は大変寂れています。若い親たちは関わりたくないって言うんです。何がそうさせているのでしょうかね。ただ人数が少ないっていうだけではないんです。組織ありき旧態依然としたものを守るために何かが変わらなければならない。山岸委員の言うように何かグランドデザインを考え直すっていうことが、色々なところに必要なかもしれない。その一つが PTA のあり方なのかもしれない。

後半の議論にも関わりますけど、須坂市がこの地域どういう単位で何を目的にどんな子育てをしていくのかっていうあたりを考える中で、今までの良さは当然あるんだけど、その良さのうち何を受け継いで、どこの考え方を変えていくっていう必要があるのかっていう、それがおそらく今チャンスというか、今やらないと何か取り返しのつかない、何か負の遺産を子供たちに渡してしまうような気がします。

我々がこれから決定しようとするこれからの政策決定はおそらく 20 年単位で影響を及ぼすことになるだろうと思います。

デジタルトランスフォーメーションという時代に、私達が想像もしないような行政の在り方、学校の仕組み、GGA スクールもどんどん進行して、学校単位の部活動はもう無理なんです。

学校対抗はですね、2023 年から部活動中体連の大会参加のあり方が変わりますけども、私達の知っている常識が、もう常識でなくなるというそういうタイミングにあるときに、私達はどんなことを大事ですか、そんな議論を続けていきたいと思います。

今の1番の議論と後半の議論を重ねていきたいと思います。まず2番目の「少子化に対する対応案について」に関して、事務局から資料をいただいていますので、説明をよろしくお願いします。

(2) テーマ「少子化に対する対応案について」

(中村学校教育課長)

小中学校の配置状況及び、学校別・町児童生徒数、児童生徒の推計（2015 年～2027 年）、教員配置基準について資料により説明。

(伏木座長)

教員配置基準の資料を説明いただきましたが、子どもが増える要素が今の日本の現状ではほとんどなくて、これから減り続けていく予想なんですけども、個人的には一番問題なのは、この大昔にできたこの教員配置基準。

これが見直されてない、高度経済成長期のものがそのままコンセプトがここに来ていることが問題なので、これはいずれ改正されていくべきもの。国のルールよりも県の方が少人数に対してお金を出してくれるルールになっているんですが、それでも複式学級を解消するとし、市町村が市費を出して教員を配置しているのが現状です。

ただ税収がどんどん減るので、県も出せなくなってきました。そうすると、市町村も同じように財政的な問題から複式学級にならざるを得ないということがどんどん増えてきます。

一方で、学年ごとに全て管理し、教育をしてきたというそのシステムに、ダウトがかかっている部分もありまして、あえて異学年混合でやることのメリット、縦割り活動を充実させていくことのメリットも、国際社会でも、我が国でも先進的な教育は進んでいる。これも教員の働き方改革の中で教員の負担を増やさないようにする、新たな教育モデルを考えるということが一方でもあります。

(島田委員)

それでは、東中学校の島田でございますが、今事務局の方から説明があったものを、東地区に落とし込んだ形での説明になるのかなというふうに思います。

東三校というふうに私達呼んでいるんですけども、仁礼小学校・豊丘小学校・東中学校と。仁礼・豊丘がまるまる東中学校に入ってくるわけですけども、一番の直面している課題が、加速する小規模校化というところです。

今日使ってる資料は須坂市の方で作成した10月1日現在の資料と、校長会の方で作成している12月1日現在の資料を基にして、転出転入等がないものとして考えている資料でありますので、当然資料の数字が変わってくることは見込めます。仁礼小学校であります、今年189名ということになります。初めて200人を割りました。そして令和9年には127名になると見込まれていて、令和元年度比で61%少なくなっていくと。各学年の生徒数と児童数を見ていただいてもわかるように、入学してくる子供たちの数がやっぱり大分今までとは違う様相になってきているという状況であります。

続いて豊丘小学校の児童数の推計です。今年度は58名ということで、令和9年には令和元年度と比べて半分の人数になってしまう。そして既にひと桁台で学級を運営しているという状況がございます。

この豊丘小学校を、先ほど複式等のお話がありましたが、それと絡めてご覧いただきたいと思っておりますけれども、通常学級の児童だけで、これは作ってあるグラフでございます。今年度、2年生と3年生のところで、国の基準ではもう複式学級の対象になっています。

しかし、先ほど触れられたように現行の県の基準、今は小規模校の豊かな教育環境作り研究、昔は旧複式学級解消という加配でしたが、それが入っている関係で、6学級が維持されています。この点線囲みは全てそこに該当するところです。

ところが、令和7年度1年生が4人、2年生が3人という数字になります。これはもう県の基準でも加配ができないので、ここは確実に複式学級ができます。

そして翌年も1～2年生で、令和9年は2～3年生で、複式学級になっていくと、こういう現状に豊丘小学校は置かれているということです。

次に豊丘小と仁礼小と通常学級の児童を足し合わせたもののグラフです。

今年度は両校合わせると通常学級の生徒ですが、234 名という形になります。令和 9 年度が 160 名になりますので、元年度と比べると 59%の数字になってくるとい形になります。

そしてそれを通常学級としての学級数に置き換えたものが次のグラフです。

今年度は 9 クラス。昨年は 10、その前は 11 で、2 年～3 年ぐらいで通常学級の数と同じぐらいで続きますが、確実に減少していく。令和 8 年～9 年は 7 学級になっていく。こんな形でございます。

次が、それ以降が丸ごと入ってくる東中学校の生徒数でございます。

今年度星がつけてある令和 3 年度 153 名であります。そして、令和 5 年 159 名をピークにその後はほぼ減少の一途をたどっていくということになります。ちなみに令和 9 年が創立 70 周年であります。

そして先ほどの小学校のグラフで見ていただいたように、令和 9 年を一つの区切りで見ていくと、令和元年度引いて 68%の生徒数に減少していく。

そしてそこから先は小学校が順次入学してくるということで、令和 15 年度まで推計しているんですけども、令和 12 年度からは 100 人を割って一気に減っていく。令和 15 年度には令和元年度に比べて 42%の数字になるだろう。各学年が 20 人前後の数になっていくという形です。

次が学級数の推計であります。今年度は 7 学級でした。昨年までは 8 学級でした。昨年度の推計では、このまま来年度以降も 7 学級が続くと思っていたんですが、来年度新たに小学級に入級する生徒が 1 名見込まれていきましたので、来年度は 8 学級に戻るだろうというふうに思っていますが、令和 6 年度入学してくる学年は 1 学級になるだろうという見込みです。そうすると 7 学級になりますし、令和 7 年度以降は、今の小学校の状況を見ると、特別支援学級、自情障学級に入級するであろう生徒は見込めるんですが、知障学級に入級する生徒はいないだろうという見込みになりますので、令和 7 年度は一気に 5 学級に減ります。

令和 11 年度以降は特別支援学級がどうなっていくかということの推計するデータがありませんので、通常関係だけの数字になっていますが、それでも通常学級だけで見ると、令和 14 年度以降は単級の学校になるという形に見込まれています。

それで先ほど教員 **てんさ** のお話がありましたが、そこについてお話をしていきたいと思います。

この表の真ん中から学級数と書かれている真ん中から右側が県からの教員配当基準になります。この表では、校長教頭、他の養護教諭を除いた、実質子供達に関わる担任・専科の数だけであります。

真ん中から左側は年度ごとの学級数のところにつけてありますけれども、今年令和 3 年度は 7 学級でしたから、担任 7 名と専科 11 名と。昨年は 8 学級でしたので、来年は 8 学級です。担任は 8 人で専科は 5 人と。合計 13 名ですが、この 1 学級の間に、差の中で 2 人の教員の数が変わっていくという県の配当基準になります。

さらにこれですね、こうなります。これは本当にきつい学校運営になります。

それが令和 7 年度からいきなり 5 学級になるわけですが、右上にあるように中学校は 10 の教科があるわけです。

そうすると 6 学級みておわかりになると思いますが、合計 9 人の教員しか配当されませんか

ら、残念ながら全ての教科の教諭を配当することができなく、配置とかできなくなってしまうってことです。令和7年度からの3年間は8名ですので、より厳しい状況になってくると。それで、昨年度8学級、今年7学級ということで、ここの部分になりますけれども、非常に厳しくなる状況の中でこれは見込みの時点で、どんなふうに、私、学校運営を考え、今年度の人事配置を考えたかっていうことなんですが、子供の数は9人増える。でも、学級数は知障がなくなって、4組さんがなくなって、1学級増える。通常学級は変わらない中で、2人減っていく。

もっと言うと昨年度は、ユニバーサルデザインの加配が0.5ついていましたので、最悪、1学級減るのに、2人、2.5人先生が減るかなっていうそんな状況でした。

これ各教科の数字数であります。令和2年度はこれだけの教員を配置していました。そして令和3年度になると、この囲まれた5教科のうち、3教科を1人で運営していかなくちゃならなくなってしまうなど、11にするためには。そんなことで非常にどういうふうにしていったらいいかということをお悩みのわけですが、一応国語を1人で社会を1人で、理科を1人でというようなことをシミュレーションで考えました。社会科が2人から1人になることを例にとると、教科の持時数は20時間になります。全クラスを教えると。そして担任を持っていると、道徳学活総合がこれだけの時間がかかります。

そして子供たちの生活記録を読んでコメントを書いたりする時間も1日1時間程度は必要になってくるわけです。他にも様々な校務があります。

これが1週間の週日課になります。

全部で29コマの授業がありますけれども、これをまず教科の20時間でやるとこうなります。

そして道徳学活総合でこれだけうまっています。

5日間1日1時間で生活記録を読んでいくと、授業のコマの全てが埋まってしまうということですね。

この先生が持っているその他の業務は、それ以外の時間で行っていかないとなくなっていくと。ここに書いてありますけど、右上にありますけど、過酷な持時数、そして生徒と向き合う時間、あるいは質の高い学びへの影響が非常に懸念される、働き方改革にも繋がっていない、そんな状況でありました。

学年別にもそれぞれの先生をどう配置するかというところで、前年度と今年度のところをいろいろ考えたわけですが、とにかく入学してくる子供たち様々な状況がある。そういったものにしっかりと対応できているのでいけるのかってことが大変懸念される状況がありました。

そして学校としても努力をしていくという形で、県教育委員会の提案公募型の特別加配に応募いたしました。

ただこれは、向こうが判断するので必ずもらえるかどうかという保証はない。

それからもらえたとしても1年ずつの加配ですから、継続的に来ていただけるかどうかは見込めないと。それから先々のことを考えると複数免許を持っている先生がいると大分学校が助かるんですが、なかなか人事異動でそういう複数免許を持った先生においでいただくことも大変困難な状況だと。そこで市教委の方に色々相談し、市長さんとも相談いただきながら、今年度市費講師という制度が新たに申請することが実現していただいて、なんとか今

年運営をしているという状況であります。

しかし、先ほど伏木先生との話にもありましたけれども、今年度、こういう形で式の講師が配置していただきましたけれども、こういう状況の中で、この先市費の講師を当てにしていけるのかというふうに考えると、それにはもう限界がくるだろうというふうに思われます。

そして県の制度の中で他校との兼務というようなことも考えられます。

そこで6学級を想定したときに9名の教員がいるんですが、持時数を考えて、例えば技術と家庭科に焦点を絞るとすると、A校には技術科の先生を配置して、家庭科の先生はいない。でも、残りの教科に配置できると。B校は家庭科を配置して。これでまあ、A校B校の間でこういう形で相互に乗り入れることによってクリアしていくことも考えられるわけです。

一応東中学校とほぼ同規模の高山中学校からデータ提供していただいて、今後の生徒数の推計を見ていきました。高山中の方がやっぱり少し規模が大きいんですよね。

学級規模はほぼ同じなんですけれども、ただ減り方が違っていて、学級数で見っていくと、東中が非常に苦しくなる令和7年度5学級になってしまうんですけれども、高山中は生徒減っていくんだけど、引き続き8学級という状況が続いていきます。

令和11年度以降は双方で減っていきますので、何とかうまくできるかもしれないんですけども、こう見ていくと東中が本当に苦しくなるところで、高山中と兼務というのは、可能かどうかってことはちょっと現時点では難しい部分も大きいだろうなってことは思っている状況です。

ここまでは各小中学校の方ですが、ここからも3校まとめたデータになります。仁礼小・豊丘小・東中の通常学級の児童数をとにかく足し合わせていきます。

令和1年度は420名いました。今年は382名。令和9年度は261名で、元年度比62%に減ります。

この辺見ていただくと、もう20人前後、それを割ってくるぐらいの入学生徒数であることは、先ほどの数字からもわかるわけなんですけれども、それを踏まえて、通常学級数を今後どうなっていくか今年度は、令和3年度全部の学校で見っていくと15学級あります。で、令和10年度以降のこの数字については白抜きの部分は全くの推計ですが、おそらくそんなに変わらないだろうというふうに思っています。

令和13年度には全ての学級が3校合わせたとして、全ての学年が単級になってくる。で、おそらくこの先へ行くと、この小学校段階の部分でまた複式になるかどうかというのはそういうような状況がまた生まれてくるだろうというふうに思います。

この令和7年と8年の間に線を引きました。11学級と12学級の差なんですけど、この線の意味は、11学級になると今東中学校の教室数を考えると通常学級だけで言うと、すっぱり収まる、一つの建物の中に収まってしまうとそういう数字になります。

ちなみに令和6年度には新商業施設が開設・開業であるという情報であります。

それで先ほど。今お話してきたことをまとめながら、当該校の校長同士でいろいろと話題にしたりとかしていく中で、少なくともこの3校の未来はこんなふうだというような討論、ビジョンは描いてみました。

やはり施設一体型の義務教育学校化が求められてくるのかなあと。

あるいは、幼保小中一貫という部分、あるいは地域の状況から言って、福祉教育地域コミュニティと融合するようなそんな新しい学校という発想も必要なのかなってということは話題に上がっています。

一貫した教育課程であったりとか、小中相互で教員が乗り入れていくようなこと、それから様々支援が必要な子供たちへの連続性のある支援。

あるいはそれぞれに分散化している資源を集中していくことのメリットがあるんじゃないかというようなことを話しています。

そして具体的には、魅力ある、この魅力というのは、この学校に通わせたい、通いたいという思いを持てる、魅力ある教育を展開していくことの必要性を、今我々は痛切に感じています。

その中で今年度の学びのあり方検討会議の中でも再三話題になってきていますが、子供たちが自立した学びを展開できていける教育、そして一人一人にあった個別最適な学びであったり、共同的に学ぶ、あるいは探究的に学んでいく、こういう視点を大きくクローズアップした学校。そしてさらに言うと、例えばイエナプランのような学校。アントレプレナー教育を取り入れていくとか、あるいは他県ではありますが不登校特例校のような形で一人一人の不登校生徒にきめ細かな対応ができる学校。小規模特認校のように、学区外からも通える学校。あるいは山村留学のように他地域からもくる。こんな意味合いで市内全地域から通学を可能にして、しかも市外から移住してでも通わせたい。そんな学校になっていくことを目指していきたいよねってことで3校の校長話題にしてるわけですけど、実際問題今年学びの改革実践校として豊洲小学校は自由進度学習にチャレンジしていますけれども、豊丘小学校でもそれから仁礼小学校でもこれから自由進度学習にチャレンジしていくという姿勢でいます。東中学校でもその要素を取り入れた授業を今年から展開し始めていますし、来年度東中学校は、異年齢型異年齢集団で総合的な学習を探究型の学びとして展開していくということをイメージしています。そういった形で来年度以降スタートしていく協議会の中でも様々議論されていくとは思いますが、今我々この3校に通う、勤務する校長あるいは職員の中でもこういった部分を共有しながら、今できることで未来を見据えながらの取り組みを始めていくところです。すみません、長くなりました。以上です。

(伏木座長)

島田委員、ありがとうございました。今のプレゼンを市民みんなに聞いてもらいたかったなと思うようなリアルなデータも出てきました。前段は子供の減り方、学校が抱える現実を教えていただきましたけれども、実はこれ、須坂のこの東中学区だけの問題ではなくてですね、県内いたるところで同様なんです。

長野県よりももっと深刻な都道府県がいくつもあるんです。こういう状況の中で、多くの自治体はどうしてるかというと、耐えられるような教員数、市町村が維持費を賄っていけるようなメンテナンスが何とかやっていけるような、そういう学校に再編統合していくっていう形をとっています。

でも、10年後20年後はまた同じことをやらなきゃなんないんですよ。先ほどグランドデザインの変換という話題も出しましたが、今ここで根本的にちょっと将来を見通して新たな

モデルを考えないと、ちょっと暗くなっていく一方ですよ。島田委員から魅力ある学校作りという話題出ましたが、ちょっと前に本多委員からね、実は中学から長野市の学校や、他の私立に出ていく生徒が出てきているというショッキングなデータもご紹介いただきましたけど、それこそですね、旧態依然としたシステムと、この時代が変わってる中で先生たちは頑張ってるんだけど、その時代についていけない授業作りをずっとやっていくと、もう見放されてしまい、若い世代の親御さんは選ばなくなるんですよ。

これがそのまま全員が小学校中学校に通うという前提で作られていますけど、もしかするともっと事態は深刻な状況になるかもしれない。

イオンモールができて、それはほんの一瞬の話で、根本的な解決にはならない。

となれば、この少子化に対応して私達はこの検討会でできる議論をし、行政の政策に提言を送りたいと思うんですが、委員の皆さんいかがでしょうか？どうぞご自由に、どんな観点からでも結構ですが、ご意見いただければと思います。

(本多委員)

貴重な資料を拝見しました。

島田委員の話の延長線上に高校の状況があるということは、昨年度、私の方からお話申し上げた通りです。今日も資料の中に、多様性を確保する必要があるとありますが、そこが本当に重要だなと思います。

今、高校に生徒が通ってきているが、あの規模であれば相当いろんな多様な価値観がぶつかり合う、ということができています。

そのぶつかり合いの中で、子供たちが大人に成長していく過程の中で、いろんなものを学んでいくと思うんですが、いつも同じ友達、いつも同じ先生、いつも同じ年齢層、いつも同じ言語の中に閉じ込められていると、どうなっているのだろうか。場合によっては、今も拝見しましたが、その状況が9年間続く。多様な価値観にぶつかり合うなんてことは、期待できないのではないかな。そういう風に決めつけてはいけないと思うが、じゃあどうすればいいかっていうと、少人数になったとしても多様な価値感とぶつかり合える、出会える、そういう仕組みを作り上げない限り、その子供たちはかわいそうだなと思ってしまう。

ただ現実問題は非常に難しく、例えばおらほの小中学校を残せとくれば、それは感情的にはそうかもしれないが、その時代のその子供たちはどう思っているのだろうと思ってしまいます。

仕組み作りにも限界があって例えば複式学級というのは財政的な面でもあるかもしれませんが、教育的面では、多様な価値観にぶつかり合うという、一つの最善策というか、方策の一つかなというふうに私は思いますが、それにしても限度がある。

そうなれば、やはり統合していったって、大きな組織集団を作っていくっていうことは、早急にやらないと。目の前に子ども達がいたりして、申し訳ないなという気が私はしている。

ただ一方でこんな意見もあって、京都大学の元総長の山際寿一さんですが、このあいだ一瞬だけやりとりをする機会がありましたが、子供たちっていうのは、地域の文化の担い手である。ということをおっしゃっていて、私もハッとしましたが、やはりそう簡単に学校無くすというわけにはいかないかな。文化が消えるということです。

ただ学校が文化を継承していく場であるっていう考え方に基づいているから、そういうことであって、そうじゃなくて地域が子供たちに文化を継承していくっていう考え方であれば、子供たちが限られた価値観とか、限られた先生、友達とか、年齢層とか言語とか、そういうことに9年間閉じ込められてしまうような状況からは脱することができるのではないかと思います。

いずれにしてこの会議に来ると本当のことを知ることができるし、いろんなご意見に触れることができ、まさに多様な価値観に触れることができ、私はとても嬉しいというか、自分が成長するなというふうに思うんですけども、そういった機会を子供たちから奪ってはいけないというふうに思います。

(伏木座長)

ありがとうございました。続けて、委員さんいかがですか。

(田尻委員)

正直、話が重すぎて、頭がついていかない状態ですなんか私からの何か意見は今何か受ける側で勉強する側でもう発言するまでまだ自分の頭が達していないので、何かすいません振られても何か意見が言えないというか、なんででしょうね。だからこそ、こういう場に参加して、一保護者として勉強させていただいてるので、ありがたい限りなんですけど、ちょっと今はちょっと意見は出せません。すいません、申し訳ないです。

(伏木座長)

後ほど感想でも良いので。おそらくあれですね、そうするとこの話題を一般市民の方々に投げても同じように重たいということでしょうね。

(坂口委員)

ちょっと前に戻ってしまうんですが、保育園では保護者会というのがあって、やはり保護者の方が負担感を訴えてきますが、やっていくうちに楽しくなってきた、「これ減らせばいいと思ったけど大事だったね」と気づいてくださる役員さんがほとんど。

もっと役員全員でやったらいいとか、仲間増やせばいいとか言ってくれる役員さんもいて、大変だから止めるとかではなく、やり方もいろいろあるんだと年々感じたりしている。

保育園でも保育士の配置基準というものがあって、ここが見直されることで、少し考えていける幅が広がってくるのかと思う。保育園・幼稚園現場の中でも職員が限られているので、タテ割りだとか異年齢保育をしながら子ども達の良い育ちを狙っているところが増えている。

子ども達がより良く生きるために、どんな場があればいいのか悩んでいるが、多様な価値観に出会う機会である学校は、人数だけではないのかなあと思う。なかなか今の子ども達、大きい集団の中では自分を発揮するという力も無かったりしているので、小さい集団の中でしっかり育って、一つずつ大きくなっていくということも大事だったりする。保護者の方も、大きな中ではなかなかちょっとしり込みしてしまったりするが小さい集まりだったりするといろんなアイデアを出していただいたりする。

数ではなく、中身ではないか。

（伏木座長）

会議に参加している事務局の方はいかがか。

（後藤主任指導主事）

いろいろお話を聞いていて、視点をどこに置くか、子供たちの教育に置くのか、地域の文化の継承というか発展というか、あるいは須坂市の子供たちのためにというか、どこに視点を置いているかっていうことにおいてかなり違ってくると思う。

そのためにもやはりそれぞれのビジョンを持って、そして最終的には子供たちのためにどうするかというところに行くとは思いますが、そこは少し整理していかないと、どうしても声が大きな方に流れていってしまうこともあるかなと思いながら聞かせていただきました。

（北村指導主事）

個人的な意見ですが、自分の中で消極的統合と積極的統合という言葉を使っている。消極的統合というのは、人数が減ってきてどうしようもなくなって統合する方法。積極的統合というのは、こうゆう学校でこうゆう教育をみんなで作りたいからこういう学校にしましょうよといって一緒にする方法。ということは自分の中では整理しているが、ぜひこの会が積極的統合の起爆剤になってほしいと考えています。そのために須坂市はどんな教育をしたい、またはこの子達にこういう教育・サービスを提供したいということを明確にして、この統合問題という来年度からの学校規模の問題をもう一回考え直す、そんな提言ができればなと思っています。

そのために、先ほど島田委員から説明がありましたデータは、東地区だけに特化されると、東だけ統合させればそれで終わりじゃないのか、つまり須坂市全体の議論にならずに東地区だけ何とか解消すればいいとか、そんな話になってしまうのが一番心配するところ。最後に、先ほど新野委員からあった、学校や教師、それから保護者が考えている以上に学校は良くならない。まさにここで何を構想するかによって、それが決まってくるということを痛感させられました。

（伏木座長）

今日は自由に意見を言っていて、次回に集約していくことなんでしょうが、根本的にどの辺りから整理していくかっていうことを考えなきゃいけないと思った。他の市町村のお手伝いもしているので、そこでの話を少し紹介させていただくと、この人口減少の中で教育をどうするかという議論のときに、教育委員会だけでは無理という声が出てくる。福祉の方と繋がらないと駄目じゃないか、とかですね。場合によっては商工会だとか、地域によっては林業だとか、そういったところと一体的に地域作りっていう観点、つまり大枠を、市長部局といったところと合意形成をとった上で進めていく必要があるという議論が、他の

いくつか、私がお手伝いしているところでも出ました。

そういうことから議論を始めるとすると、今日の話題で言うと、コミュニティスクールのあり方、つまり先生たちは赴任してきて、何年間でまた異動してという、そういう専門家として来てくださるわけだけど、子供がそこに18年、あるいはずっとそこで育ちながら生きて、この町を作っていく中核になる人になるわけですけど、先生にあまりにも依存しすぎている可能性がある。

そうすると地域がもうちょっと主体になる、みんながみんなに参加してくれればありがたいけれども、そんなうまいことにはならないけれども、地域の中で主体的に地域作りを担う人をどんどんこう、育てるような仕組みの中にコミュニティスクールが機能し、それが広い意味ではPTA活動にもなってくるという、そんな形を何か考える必要があるのじゃないかなと、個人的に思っていて、教育委員会でできる部分は限られている。そこやでも限界があるということがあって、ぜひ教育長は市長と対話する機会を取っていただいて、少しスクールをですね、この市として方針みたいなものを一度ですね、年度内にやっていただければ、というふうに思いました。

現状では地域と学校が繋がるというのは、教頭の仕事が増えるばかりで、本当にきついのです、学校は。いいことやっているのだけでも、やっぱり地域が主体となっている、先ほど紹介した例えば大町的美麻では、アメリカのある町に、2年に1回、子供たちを連れていくのですが、地域の人が引率するんですよ。

それから地域の行事、地域のお祭り、これも地域の人たちがやるんですよ。そこに学校関係者が参画させてもらっている、そうやって子供たちを地域で育てていくってことです。ね。

今多くの長野県内の学校は地域の行事地域の文化を学校が担っているという、そういう側面がまだまだある。昔は人数がたくさんいたから良かったのですが、今ちょっと先生たちはアップアップしてて、ちょっと気の毒な状態にあるという現実を、地域の人も理解していただく必要があると、そんなふうにまず思いました。

いかがでしょうか？

（新野委員）

第1部にもちょっと繋がってしまうんですけど、私PTAをやるときに一番ショッキングだったことがですね、北村先生が東中学校の校長先生だった時だと思うのですが、保護者からの学校評価という、その記載の中にですね、宿題を出すのをやめてくれという記載があったんですね。

自分の子供が受験勉強間に合わないから受験勉強に専念させてほしい。

これを見たときに、一つの問いが浮かびまして、これからグランドデザインを考えていく上でも大事なことだと思うんですけども。学校って自分の子供だけのものでしょうか。それともみんなのものなんでしょうか。

私達大人が子供を面倒見るとか世話をするとか、そういった諸々から離れている、教師もそうです、離れつつあるのは、損得ですよ。いわゆる自分がやったことに対して見返りがあるのかどうか、その人から返ってくるのかどうかというところに、どうも主眼が置かれてい

るように思うんですね。税金払っているのだから教育サービスを受けさせろっていうような、なんで私がこれやらなきゃいけないのっていうことが先に立つんです。インセンティブが自分から始まってしまうっていうのがどうも傾向として、でも私達がこうして、この須坂市や日本国において飢えることなくこうしているのは、私達が会うこともなかった様々な人たちの協力のおかげで今こうなっているんだ。だから教育っていうのは交換ではなくて、未来に送っていくんだと。自分たちはそれを受け取ってきているから、それを自分たちの中で消費するのではなくて、それをより良い形の中で次に来る人たちにパスをしていくんだよっていうことが、根本的に今の保護者や教師に欠けているエッセンスだと私は思ったんです。

実は仁礼小学校の PTA 会長やってるときに、既にこの人口動態っていうのは PTA の中でも把握しておりまして、この東中学校の運営や豊丘小はさらにきつかったので、当時はまだ令和 7 年までのデータは出ていなかったんですけども、そのときにどう考えようと言ったときに、PTA 役員の中では、今日の冒頭で、教育長がお話された、冬景色です。冬景色とは何かと言ったら、情緒なんですよ。

教師による教室での教育だけで子供が育つというふうには、それも大事だけれども、私はそうじゃなくて、登下校で歩いている時の景色だとか、この先生つまらないな、ムカつくなっていう愚痴でもいいし、その、実際に五感で体感する時間を、ちゃんと子供たちに確保してあげられることが、最も教育的な資源になり得るだろうということを話していました。統合はやむを得ないかもしれないけれど、それをもし先送りをするのであれば、東中学校の道を一本はさんだ下の村石地区や野辺地区がなぜ常盤中学校に行くのか、ということであれば、若干の時間の確保ができてそこで、今後の未来を考える民主的な時間もあるだろうということまでは、三役まで話が出ていたことがありました。

私が思うのは、多くの方々が、高校再編の会議でもあったのですが、何かどこかの大学の高名な教授かなんかが、将来何か 65% は、子どもが大人になるころに仕事が変わってるよっていうことを、いちいちそのキャッチーな背景に持ち込むのではなくて、人間であることはやめられないんだから、どんな世の中が変わろうが、社会的な諸条件や経済的な諸条件が変わろうが、それに左右されることがない人格をどう育てるのかっていうことを私達の使命に持ってこなければ、時代の中で経済的な状況の中で、鼻っ面を常に振り回されて、あーでもないこーでもないが始まるのじゃないかなと。

ぜひそんなことを根幹に置かなければいけないのかなというのが、5 年前の仁礼小学校の話でした。

(宮川委員)

地域だとか、そういったグランドデザインもそうなんですけれども、いろんな組織との関わり方という部分に関してですが、今までは例えば企業に中学校 2 年生の子供たちを受け入れて、キャリア教育の一環として、職場体験事業というのを実施しておりました。それがコロナの関係で変わり、教育委員会と須坂商工会議所との連携で、今年の職場体験では、東中学校、島田校長先生の所に私が講師になって行って、90 分の授業をやらせてもらいました。私、ライフラインを担うという講義を行ったんですけども、現在の状況だとかエネルギーに関するものとかそういったものを私自身が先生となって、生徒たちに教える機会をいた

できました。

そのような中で、先ほど本多先生も言っていたように、一つの授業を作るのに何時間もかかったかと、そういったいいものを作ろうとするにはそれなりの時間が必要だというお話いただいたときに、私も中学生に教えるのは初めてで、その準備にどれだけの時間を割いたか。子供たちにどうやって伝えれば伝わるのか、それってすごくかみ砕いた中で非常に勉強させていただきました。

それがやはり先ほどの機会を創出するっていう部分でいったときに、子供だけが職場体験事業で学んだのではなく、私自身もこの歳になって、教える側になって、いろいろかみ砕いて、自分の仕事、自分のキャリアに対しての再確認することができました。

これって、非常に、先ほどからいろんな話も出てきているんですけども、地域の大切な資源の一つ、そのスキルを外から呼び込んで話を聞くのではなく、それぞれのプロがたくさんいるといったことをこういった機会を持っていろいろ子供たちに対して、さらに子供だけではなく、もっと広い部分で、この地域、須坂が学び合うことによって、すごい人があるな、こんな大人がいたんだという身近な繋がりができるんじゃないかなというふうに感じました。その中で、先ほどやはり継続していく、いろんな部分で、人口減少という部分があるんですけども、やはりこの地域が学び合い、そこで魅力ある地域だと、生き生きしてる人たちがいるといったものを作り上げていくことが、私たち親もそうですし、親が元気にならないと、子供たちも塞ぎがちになると思うので、そういった部分を考えますと、非常に今回のそういった職場体験も含めて、やらさせていただいたご経験もお話させていただく中で、もっともっと広く空いた空間がもしあれば、そこでいろんな、もっともっと講義を大人同士ができるような場を作ったりだとか、そういったことも非常に私は進めていければいいかな、というふうに思っています。。

（伏木座長）

貴重なお話をいただきました。

先ほど地域作りからっていうな話をしましたけど、ここでは学校作りをメインで考えていかなきゃいけないけれども、魅力ある学校って何かって言ったら、私達が子供のときにはおそらく進学実績だったんですよね。

今でもそれを引きずっている方々おられるし、ちょっと違う議員さんたちの中にはそこを訴える方もおられる。でも今ちょっと変わり始めていて、先ほど本多委員の中にもありましたし、島田委員のプレゼンの中にもありましたが、多様性を受け入れる、こういうことが今、学校の喫緊の課題になっています。

今まで、発達障害と言われていたお子さんたちを、政府の新しい審議会では、特異な才能を持つ子供と言っています。

発達障害って言って、みんなと同じじゃできないと言われた子の中の圧倒的多くの子が、他の子にはない特別な才能を持っている、そういう見方をする審議会が今動いているんですが、今の私達が子供の頃受けてきた教育、学校環境にはそれに対応できてなかった。

ただいろんな意味で多様性、この中には外国籍の子どもも入ってくるでしょう。

そういう特異な、いろんな個性が潰されない、そういう子たちになる学校、そういうことが

おそらくこれからの魅力ある学校の条件になってくるかなと思うのです。

一方でやっぱり教員集団は数がいないと、十分な教育力を保障できない。

教育活動も充実できない部分も確かにある一方で、地域から学校、子供いなくなつては地域が崩壊していくっていう面も当然ある。ですから両面、統合すべき部分と、あるいはやっぱり残して、デジタルツールを使いながら、今風の環境を充実することによってネットワーク化をすることによって、その地域に学校環境を維持するという方向と、両面並行しながら考えていくことが必要だなと改めて思っています。

今、私が携わっている教員養成のジャンルでも先生になろうとする若者が激減しているのです。教員採用試験を受ける数が年々減っています。

学校現場は人不足になっていて、せっかく加配教員っていう数字を県が出しても人が見つからないんです。

それぐらい今、教育現場にブラックというイメージが出ている中で、どこが最初に魅力ある学校地域をつくるか、どういう教育を打ち立てる自治体が出てくるかっていう、今それが、喫緊の我々の会議の課題なのかもしれないな、というふうに思いました。

今日はそろそろ時間なので、次回に持ち越そうと思いますけれども、座長の方から三つ皆さんにちょっとお願いしたいと思うことがあります。

この2年間の貴重な議論を次回に最終的にまとめていくためにですね、

1点目は、これまでの議論を無駄にしないっていうことです。

私が携わってる委員会の中で、ここまでですね、丁寧に、どういう教育がいいんだろうとか、こういう理念的なことを議論した委員会はありません。

すごく素敵なことです。

実務のことが先行し、数合わせが先行する、こういう学校再編の話になりがちな部分の中で、これまで私達が積み上げてきたこの議論を無駄にしないように、それを生かしていくっていうことをぜひ考えていきたいなと思っています。

2点目は、地域の人々とともに動いていくっていうことです。

これは地域の声は大切にするんだけど、お客様扱いして、我々カスタマーサービスじゃないので、はい、じゃあそうします、ということじゃありません。

私達は地域の人と一緒に未来に向けて、これまでに積み上げてきた須坂の良いところを残しつつも、やっぱり私達が知らない、これからの世界にどう子供たちを育てていくのか、というある意味、委員会が地域住民を啓蒙するっていう役割もしなきゃいけないんじゃないかなと思うんですね。これからの時代に向けて。それは市民を置いてけぼりにしないで、常に対話の窓口みたいな、そういう仕組みは大事にさせていただくということです。

最後の3つ目はですね、発想の転換が必要なかもしれないと、私たち一人ひとりが自分の胸に手を当てて、考えていくってことです。

私達は責任感を持つときには自分の知ってることを語る。自分の思うことって経験からくるんですよ。

でも今、この GIGA スクール時代になり、こども庁ができ、デジタルフォーメーションが求められる時代になったときに、今までの私達の発想ではちょっと乗り越えられないような、そんな時代になっているのかもしれない。

おそらく教育内容なんかは月岡さんが頑張ってこられた SDGs とか ESD とか、それからこんな内容になるでしょうし、宮崎委員の世代なんかは東大に合格しましたとか、なんか有名私大に合格しましたってことは全然威張れることにならない、そういう世代におそらくなっていくんじゃないかと思うんですけど、その発想の転換をして、新たなものを須坂から生み出そう、発信しようという意気込みを持って最終回に臨みたいなど、ちょっと理想を高く掲げましたけれども、以上三つ申し上げて今日の議論はここで閉じたいと思います。では事務局の方にお返しします。

(小林教育長)

今ちょっと震えが止まらないような状況です。

今日の2時間はあっという間に過ぎました。

皆さんの思いの丈を、私達が受け止めて、これから第6回に向けての資料を作ったりしていくわけですけども、今の伏木先生の最後の三つのご提言。

大切にしながらいきたいというふうに思います。

例えば、最初の新野さんのお話の中に出てきた、P と T が一緒に学ぶってという言葉があったんだけど、一緒に学ぶ内容というのを我々は、これまで一人一人の中に、何を子供について一緒に学ぶべきことなのか。それは何なんだっていうその中身について、あまり議論してこなかったな、未来に向けての子供たちって言うけど、その具体の具体の具体に自分のイメージネーションがですね、そこまでいってない、ただ言葉だけがこう動いていた部分はなかったかなとか、思うことがあります。

具体を掘り下げて、自分のことをやっていくと、その中に見えてくる、その子供の未来と自分の関わりみたいなのが見えてくるんじゃないかなということを2時間の間に勉強させてもらいました。

本当はまだお聞きしたいことがあります。

例えば、坂口さんが言った小さいところから少しずつ大きくしていけばいいんじゃないかなっていうのとか、本多先生がおっしゃった多様な価値観とのぶつかり合いが大事だっていうところ、それは年齢によってどんなふうに育ててあげたらいいのかっていうことについては、私もとても興味があるので、もうちょっと自分の中で整理したいと思う。

田尻さんが、学ぶって言ったんだけど、本当はお子さんのことを喋る機会もいつか作りたいなあというふうに思っていますけれど、すみませんでした。でも伏木先生がおっしゃったように、田尻さんに、私の子供から言えばこうなんだなっていうふうに思えるようなものを提言していくことが、私達の大切な市民へのアピールかなということも思ったり、様々なことを学ばせていただきました。

4 次回内容について

中村課長：

次回は1月24日月曜日9時半からになります。会場はこの305会議室で今日と同じ場所です。よろしくお願いいたします。

それでいよいよ次回まとめに入るわけなんですけれども、今日の資料に提言書の骨組み案というものがあります。先ほど伏木先生の方からもですね、重い宿題をいただきまして、事務局としてもどうしていこうかな、というところなんです。が、次回の会議で一気にまとめるということではなくて、その前にメールで皆さんと何度かやりとりをさせていただきたいと思っています。正月を挟みますが、よろしくお願いいたします。

5 閉 会

清水次長：

以上をもちまして第5回子どもの学びのあり方検討会議を終了します。